

プログラム・ノート

林田直樹

いまクラシック音楽の世界では、「ピリオド楽器」が、ひとつの大きな潮流となっている。作曲家が活躍していたその時代(=ピリオド)の楽器の響きや演奏法を再現することによって、作品に新しい光を当てようという試み——それはピアノのみならずオーケストラや室内楽、オペラに至るまで、あらゆる演奏シーンに根本的な変革をもたらしつつある。

昨年については、第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクールがワルシャワで開催された。それは、ショパンをはじめとするロマン派ピアノ音楽の演奏解釈において、いまやピリオド楽器の存在が無視できないほどに大きくなってきていることを証明する事件であった。

私たちがよく知る現代のモダンピアノは、性能や表現の幅において、19世紀の作曲家たちが想像もつかなかったほど、ある意味完成の域に達している。それは、鋼鉄のフレームを持った、強靱で高品質で安定した工業製品である。

しかし19世紀のピアノは、華奢で不安定な、いうなればアンティークな手工芸品であり、一台一台がすべて違う。規格化されていないのだ。その真価を演奏家が引き出すには、専門的スキルと経験が必要となるが、それがうまく行くなれば、失われた過去の香りを漂わせた至福の響きを、私たちは耳にすることができる。

本日演奏に使われるのは、かつて福澤諭吉の孫が所有していた1867年エラール製で、2004年にサントリーホールが譲り受けたもの。エラールは19世紀を代表するフランスのピアノ・メーカーで、ベートーヴェン、ショパンやリストが愛し、ロマン派ピアノ音楽の発展に大きな影響を与えた伝統を持つ。

第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクールの優勝者トマシュ・リッテル（1995年ポーランド生まれ）が、この歴史的名器からどんな響きを引き出すのか、興味は尽きない。

フレデリック・ショパン (1810～49) :

ポロネーズ第14番 嬰ト短調

1822年または24年、つまり12歳か14歳の頃の作曲とされる。作曲者の死後出版されたもののひとつ。ショパンは7歳頃からピアノ曲の一ジャンルとしてのポロネーズを書きはじめていた。この曲は、哀愁ある主題、トリルの重ね方、精緻な装飾音、すべてにおいて完成度が高い。少年ショパンが、作曲家としての自己をいかに早くから確立していたか——その天才性を如実に示す作品である。

2つのポロネーズ 作品26

ポロネーズとはポーランドの宮廷舞踊に起源をもつリズムを特徴とし、バロック時代から舞曲の一形式であった。それを内容豊かなピアノ曲のジャンルとして本格的に定着させたのはショパンの功績である。

ここで演奏されるのは、ポロネーズ第1番、第2番と通称される2曲のセットで、1834～35年、すなわち20代半ばの作曲。ポロネーズとしては初めて生前に作品番号付きで出版されたことから、この2曲にショパンが並々ならぬ自信を持っていたことがうかがえる。

第1曲の嬰ハ短調は、暴発するような激しさと憂いに始まり、優美な表情の中間部を経て、再び激しさが戻ってくる。第2曲の変ホ短調は、苦悩と陰鬱さに満ちており、独立が失われロシアの圧制に苦しんでいた当時のポーランドを思わせる。

4つのマズルカ 作品33

ポロネーズが貴族的な舞曲だとすれば、マズルカは農民的な舞曲である。少年時代のショパンは、踊りを楽しむ人々の集う民家を見つけ、父が止めるまで、いつまでも窓から様子をうかがっていた——という逸話が残されている。マズルカとポロネーズの最大の違いは、男女がペアになって回りながら踊るという点にもある。

ショパンは生涯にわたってマズルカを書き続けた。その数およそ60曲ほどで、すべてのジャンルのなかで最も多い。ショパンの心には、常にポーランドへの思いが片時も忘れることなく、燃え続けていた。あたかも母国語でこそ本当の気持ちが語れるのだ、といわんばかりに、マズルカの多彩な音楽世界には、ショパンのすべてが込められている。

この4つのマズルカは、1837～38年の作曲。悲しみに沈んだ嬰ト短調、華麗なニ長調、優美なハ長調、暗い情熱を秘めたドラマを展開するロ短調——これらが続けて演奏されることで、マズルカ特有のさまざまな表情の変化を楽しむことができるだろう。

なお、この作品が作曲された頃は、作家ジョルジュ・サンド(1804～76)との運命的な出会いから間もない時期であった。のちのドストエフスキーにまで影響を与えた文豪であり、早くから社会主義的傾向を持ち、女性解放の先駆者でもあった、この傑出した女性と共鳴しあい、共同生活を二人が始めたこと、そしてその傍らに画家ドラクワロがいたこと——それは、19世紀のヨーロッパ文化史における、かけがえない輝きのような出来事であった。

バラード第4番 へ短調 作品52

バラードとは文学における物語詩のことで、その起源は中世にさかのぼる。ショパンは、その劇的エッセンスを盛り込んだ、大規模なピアノ曲としてのバラードを確立させた。ポーランドの愛国詩人アダム・ミツキエヴィチの詩に触発されたという説もあるが、ショパンが出典となる詩を明示していない以上、詳しい物語のディテールを求めるよりは、物語の雰囲気をも暗示的に漂わせた音楽を聴きながら、自由に想像の翼を広げて味わいたいものである。

第4番は1842～43年(32～33歳)、恋人ジョルジュ・サンドの庇護のもと、ノアンの別荘とパリを往復していた頃の作曲。穏やかな安息、蒼ざめた苦悩、悲壮で決然たる調子、あらゆる要素が包含された劇的内容は、ショパンの到達した最高の境地である。

ショパン(ケナー、ドンバク 編曲):ピアノ協奏曲第2番 へ短調 作品21

1830年3月17日、20歳のショパンはワルシャワにおける正式なデビューを、完成して間もない、このへ短調協奏曲で飾った。第2番とされているが、事実上のスタートはこの曲によって切られた。

ショパンは第2楽章の楽想について、友人にあてた手紙の中で、ある理想の女性(コンスタンツィア・グヴァドコフスカというワルシャワ音楽院の女学生のこととされる)への思いを託したことを打ち明けている。哀愁に満ちて堂々とした第1楽章、ポーランドの民族舞曲の息吹きを感じさせる第3楽章、どちらも気品を備えている。

なお、ショパンは生前室内楽版でも自らの協奏曲を演奏したが、その編曲楽譜は残していない。本日使用される楽譜は、当時のサロンにおける演奏スタイルを復元しようとするもので、ピアノ・パートは最近の研究成果を反映させたヤン・エキエル教授(1913～2014)によるナショナル・エディションの楽譜に準拠している。弦楽パートは、ガット弦を使用し、エラールの響きとのバランスをはかった演奏になるとのことだ。

(はやしだ なおき・音楽ジャーナリスト、評論家)